

竹内久美子論

和田 勉

一
竹内は、動物行動学や分子生物学で得られた学問の成果を踏まえて、分かり易い随筆として綴っている。専門は動物行動学であるが、分子生物学についても造詣が深い。それで本稿では、竹内の著書の中で遺伝子と関わるところを中心に分析したい。また、猿や鳥などの動物そのものについて述べている箇所にはできるだけ触れず、あくまで人間の特質に関わるところを中心に考察したい。更に、リチャード・ドーキンスやデズモンド・モリス等の著作と対比することで、竹内の随筆の特質についても考察したい。また、現在の分子生物学において定説に近いものと、竹内自身の想像力によって独自に脚色されているところについても言及したい。

竹内の随筆の独自性と問題点について具体的に検証するが、随筆を中心とした竹内の活動を、非文学テキストと捉えるむきもあるかもしれない。だが、竹内の随筆には人間とは何か、生命とは何かということが根源から問われており、現代社会の諸現象を斬新な視点から独自に捉え、描き出している。小説よりも随筆のほうが、時代の流れと社会の現実を直截に表現するのに適した形式であるとも言えるだろう。それゆえ竹内の随筆を、本稿では広く現代の文学の範疇に属するものとして捉えることにする。

竹内の随筆への評価は、賛否が分かれるが、主なものについて見ていきたい。まず、大岡玲は「生命への疑問に迫る女性研究者」^中の中で、「ヒトの生と性について、そりゃホントかいな、と思わずいいいたくなるような説を、ユーモアたっぷりを書く竹内久美子の一連の『作品』は人気者だ。あえて『作品』と言ったのは、生物学の様々な説を採用して竹内氏が展開する理屈が、上質のフィクションに限りなく近い感じがあるからである。科学が仮説の連続でありフィクションであるのだから、この表現はもちろん批判を意図してはいない」と肯定的に述べている。

一方で、粕谷英一は「社会生物学と新型のオールドタイプ人間論——竹内久美子批判」^中の中で「第一に、竹内の人間についての『社会生物学的』記述には、動物行動学や動物の社会生物学からの根拠があるわけではない。第二に、竹内の論法では人

間についておよそどんな結論でも導くことが可能である。そこで第三に生物学からの議論というよりはオールドタイプの日本人論の新型とでもいうものになっている。第四に、そういうやり方で出てくる竹内のメッセージにはそれなりの一貫性がありこちらの方がむしろ大切である」と述べている。第四の「大切である」というのは、メッセージ自体の問題の方が重要であるという指摘である。粕谷の論に見られるように、専門分野からの批評はかなり手厳しいと言える。その背景としては、寺田寅彦が『科学と文学』の中で述べている、「盛るべき容器が科学的事実である限り、其の容器に科学的破綻があつては工合が悪いのである。尤も其れは読者の科学的知識の水準次第で、甲が此種の破綻や矛盾を感じても、丙は知らずに観過する事は屢々ある」というようなことも関わっているだろう。

二

竹内の各作品の内容について、刊行順に遺伝子と関わるところを中心に見ていくことにする。ただし、子孫を残すという活動についても、自分の遺伝子のコピーをいかに増やすかとか、相手の優れた遺伝子をいかに取り入れるかという観点から捉えると遺伝子と関わるので、考察の対象の範囲内ということにする。

『ワニはいかにして愛を語り合うか』（昭61）の中では、ワニやチンパンジーや蜂などが、どのようにして愛を伝え合うか明らかにしている。例えば、ミツバチの「匂いの信号」について記した後、「オスは、女王バチの体内で受精が起こり、遺伝子が混ぜ合わされるまでの、遺伝子の一時的保存場所と思えなくもない」とまとめている。人間の心身についても、動物行動学の視点から具体的に分析している。表題の背後には、高等動物であるはずの人間も、感情を支配する脳の部分は、ワニとあまり変わらないという意味が含まれている。

『浮気人類進化論——きびしい社会といいかげんな社会』（昭63）の中には、ゴリラは一夫一妻制であるゆえにオスどうしが格闘するので身体が発達し、チンパンジーは乱婚的で精子レベルでの闘いがあつたゆえに睾丸が発達したとある。ライオンや蟻螂や蝶など他の多くの動物の行動様式とも比較した上で、人間の脳の発達も同様の観点から捉えており、竹内の考えは表題に明瞭に示されている。「私は動物行動学を学んでおり、人間を他の動物と比較検討して考えることはできません。この本は、動物行動学の一学徒が、人間とはいったい何か、なぜ人間は人間になったのかという大テーマに、野暮は承知の上で取り組んだ結果なのです」と述べている。確かに、竹内の関心の中心にあるのが、人間はどういう存在か。どこから来て、どこへ行くかとしているのか。日本人とは何か。男と女とは、どういうもの

か、というようなことである。ここで人間というのは、進化の歴史を経てきたホモ・サピエンスというような意味合いが当然のことながら含まれている。

『男と女の進化論——すべては勘違いから始まった』(平2)では、女はなぜ皺を恐れるのか、なぜ背の高い男が好まれるのかといったことに言及している。また、戦争のストレスが胎児の脳に影響を与え、同性愛になる傾向があるという説などに触れている。更に、「ピグミーチンパンジーでは、オスの攻撃性が、集団内、集団間を問わず同性愛行動によってかなりなだめられている」という説を踏まえ、動物行動学の視点から人間の社会でも「同性愛は平和に役立つ」というような独自の説も盛り込んでいる。分子生物学から得られた成果を竹内なりに解釈し、応用しているので、読み物として書かれているという側面を見落とすべきではあるまい。解き明かしの糸口を、人間の中にある動物としてのあり方、つまり、人間が猿だった時代から脈々と受け継がれている遺伝子の存在に置いている。

『そんなバカな——遺伝子と神について』(平3)は、人間が遺伝子を運ぶ器にすぎず、遺伝子の願いはひたすら自己のコピーを増やすことであるというドーキンスの説にもとづくユニークな人間観察が中心となっている。個体は自分と同じ遺伝子を共有する血縁者、つまり子、兄弟、イトコのためなら、血縁者の中に分散されている自分に対してあたかも自分自身に対す

るかのように振る舞う場合があるというのが眼目である。「人間は遺伝子とミームという二種類の自己複製子の乗り物である」という観点」から人間を捉えており、「本当に、男も女も利己的遺伝子の陰謀に早く気づくべきなのである」とまとめている。遺伝子を擬人化して、まるで意識があるかのように捉えているところに本書の特質がある。嫁と姑が憎み合うのも、子を持つと同時に冒険心を失うのも、小児喘息の子が親を脅迫するのも、すべて遺伝子のなせる業であると述べている。遺伝子を擬人化してしまふところは、分子生物学の研究の現状からすると飛躍しているとも言えるが、そこがユニークなところである。

『賭博と国家と男と女』(平4)では、「君主制と階級制(順位制)がなぜ優れているのか。その一番大きな理由は、これらのシステムが動物の社会進化の歴史の中で自然発生したということ、さらには長い淘汰の試練を受けつつも未だに残っているということである。それ以外の国家の形態——たとえば、社会主義や共和制——は、人間の頭の中から出て来た思想の産物である。そこでは遺伝子ではなく、個人が考えられる。個人の尊重、個人の尊厳、個人の平等……だ。裏を返せばこれは、遺伝子に対する挑戦であり、冒瀆であり、差別である。そのような考えが、あの利己的遺伝子にどうして太刀打ちすることができよう」と大胆な説を提示している。共和制が広まったのは、たかだかこの二百年のことにすぎないが、君主制の長く続いた原因を遺

伝子にあるとしている。だが、国家論の根柢にまで遺伝子を適用するのは独創的ではあるが、人文諸科学も取り込んで複合的に捉えることが求められるであろう。好色な男は組織の指導者にふさわしいが、恐妻家の男がトップになると国が滅びるといふようなことにまで言及している。ただし、第三章で具体的に採り上げているのが、伊藤博文やチャウシェクのような限られた例であり、確かに好対照ではあるが、例証に欠けると言わざるを得まい。「例を挙げてみたところで統計的に処理しなければ何ら認められないのが正統な学問の世界である」(『賭博と国家と男と女』)ことは、本人も承知の上である。自説に都合のいい具体例を挙げて論じている側面は否定できないが、ユニークな視点から独自に論じており、そこが読み物としてのおもしろさを増しているところでもある。第四章では、人間における数の能力の進化に関わったものは賭博であると述べている。賭博の胴元が国家の始まりであるとか、一夫多妻では文化が創造されるとかといった独自の説を展開している。表題の内容にまつわること遺伝子の視点から分析し、興味深い読み物として綴っている。

『小さな悪魔の背中の窪み——血液型・病気・恋愛の真実』(平6)の表題には、郭公などのいわゆる「托卵」を行う鳥の雛のことが託されている。他の鳥の巢に産み落とされた郭公の雛は、まだ羽化したばかりで目も見えないうちから、巢の中の本当の

卵を背中の窪みに乗せて巢の外へ放り出すという。血液型といくつかの病気に対する抵抗力の相関についても、豊富なデータと科学的な情報をもとに言及している。例示されたデータが偶然を含む可能性があるので鵜呑みにはできないが、意表を突く視点からの面白さがある。また、孔雀などの雄の尾羽が美しいのは、雄の持つ生存力についての良い遺伝子を、雌が尾羽を手掛りに選んでいるという説も挙げている。細菌やウイルスなどの「寄生者」に対する免疫的抵抗力を示しているというのである。「高温多湿の熱帯地方では寄生者からの脅威が著しい」ので、「男の価値などというものは、所詮は寄生者に強い遺伝子を持つているかどうかだけなのではないのか、男などという生き物はそれを示すシヨウケースのような存在ではないのか」とまで極論している。

『パラサイト日本人論——ウイルスがつくった日本のこころ』(平7)では、人間も含め生き物の行動は、ウイルスなど「寄生者」の存在で語れると述べている。ウイルスなどが宿主に寄生して自らの遺伝子のコピーを増やそうとするが、人間もそれら病原体と密接に関わっているというのである。また、京都人が恐妻家で、九州で男尊女卑の風潮があることの謎を解く鍵も「寄生者」にあると記している。ミトコンドリアが語る日本人のルーツや縄文人だけが持っていたレトロウイルスについて、分子生物学などに拠りながら指摘している。さまざま資

料を駆使しながら斬新な説を展開しており、白血病のレトロウイルスが日本人の相互協力的な性質を作ったと論じている。パラサイト仮説は、ハミルトンらによるものだが、竹内はそれを日本人に適用して独自に考察している。

『BC！な話——あなたの知らない精子競争』（平9）では、「人間の性を取り巻く局面は、ほとんどすべてが精子競争スパーム・コンペティションに関わる」（「あとがき」という視点で生物学の話題を紹介している。「EPCウツキ」も売春も優れた遺伝子を取り入れ、自分のコピーを増やそうとするためのBC（生物学的に正しい）な行為であると述べている。この意味ありげな表題を学問的に表の意味として解説するところもしたたかである。

『三人目の子にご用心——男は睾丸、女は産み分け』（平10）では、鳥や魚や昆虫などの繁殖戦略を分かり易く説明し、それを人間に当てはめている。息子を産むか、娘を産むかでその後の遺伝子の残り方が違うことにも注目している。生物学から得られた内容を踏まえながら、明解でユーモア溢れる文体で綴っている。動物行動学の視点から、より優秀な遺伝子を取り込むために「EPCウツキ」を必然的なものとして捉えている。

『シンメトリーな男』（平12）の中で、「動物はたとえ栄養的に恵まれ、汚染物質による被害を蒙っていないなくても、寄生者パラサイトにだけは常に付きまとわれているのだ。シンメトリーやシンメトリーに近いことは、それらシンメトリーを脅かす存在に見舞われ

ていないこと、見舞われたとしてもそれに打ち勝ち、立派にシンメトリーを発達させることができたという証拠である。個体が、いかに体をしっかりと、安定して発達させられるか、という能力はシンメトリーに現れるのだ。シンメトリーはこうした体の性能について、その遺伝子の優秀さが最もよく示される現象である。メスとしては何としても見逃すわけにはいかないのである」と記している。生育中にさまざまなストレスを受けて、身体にはズレが生じるが、そのズレの少ない男がすなわちシンメトリーな男であり、競争に強い優秀な遺伝子の保持者であると述べている。「シンメトリーな男は精子の数が多く、精子そのものが優秀なのである」というような具体的な調査も根拠として挙げている。左右対称という身体の特徴の問題から発展して、男と女にまつわる社会の通念や種々の現象について、シンメトリーの視点から捉え直している。そして、「倫理、道徳、戒律、思想といった人間の言語的文化を産み出した起源の一つは、シンメトリーではないのか、つまりシンメトリー男とそうでない男との勢力争いの中にある。そしてそれら文化とは、シンメトリーではない男たちによる主に女に向けての情報操作ではないのか」というようなところにまで及んでいる。

ところで、『私が、答えます』動物行動学でギモン解決！（平13）の「あとがき」の中で、竹内は「どの本にも一応、テーマというものがあります。初期の頃の物は、動物行動学の基

本的な考え方、有名な研究、古典的な研究を紹介すること。中期の物はそれを遡る何年間か、動物行動学の世界を席捲した研究について。そして後期の物は、書く直前か、書くのとほぼリアルタイムで進行した研究についてです」と述べている。この「あとがき」の要約に従って竹内の随筆を大別すると、「初期」というのは平成三年の『そんなバカな！——遺伝子と神について』までに該当するだろうし、「中期」というのは平成七年の『パラサイト日本人論——ウイルスがつくった日本のこころ』までに該当するだろう。そして「後期」には、精子競争やシンメトリーを主に採り上げている。

ただし同じ中期の作品でも、『小さな悪魔の背中の窪み』（平6）は、前作の『賭博と国家と男と女』（平4）に比べると、専門の方に戻っており、自己の主張にデータ分析などを付け加えて論証しようとする姿勢が表に出ている。『賭博と国家と男と女』では、本来の竹内の研究分野から拡散しすぎたために、『小さな悪魔の背中の窪み』ではその反動として動物行動学の方へ収束したと見ていいだろう。

三

竹内は日高敏隆との共著『もつとウソを！——男と女と科学の悦楽』の中で、「私はその頃、好きな作家が三人いたんです

よ、先生（日高のこと——引用者注）は別格として。一人はドーキンス、二人目はデズモンド・モリス、それから『鼻行類』（博品社）のシュテュンプケです。この三人の持味がすごく気に入っていた」と述べている。竹内がモリスやシュテュンプケやドーキンスをどのように援用しているのか。彼らと比べて竹内の考えがどのように独自のものであるのか考察したい。

モリスの『裸のサル——動物学的人間像』は、表題が示すように、人間をあくまで裸のサルという視点から捉えているが、竹内の著書でも同じ視点が継承されている。また、進化の謎を究明しようという視座にも竹内と共通したところが見られる。

竹内がモリスのことを「学問でエンターテインメントをする」（『そんなバカな！——遺伝子と神について』）と述べているが、これはそのまま竹内にも当てはまる。ただし、「モリスの見解は残念ながら、『利己的遺伝子』や『利己的ミーム』という考えが出て来る以前のもので、行動や心理の説明のために進化論的アプローチがなされていない」（同前）というところに、『裸のサル』の時代的制約ゆえの限界がある。竹内はドーキンスなどの新しい視点に則っており、『裸のサル』でモリスが記した考えを推し進めたり、日本人を見る場合に援用したりしている。

モリスが一九六七年にヨーロッパのキリスト教の風土の中で人間を裸の猿と捉えたのに比べると、竹内の場合には、タブーの少ない現在の日本で著述しているのであるから抵抗は少ない

と言える。また、これとも少しは関連するが、竹内が動物行動学から発展させた予測の部分を仮説として大胆に展開するところに違いがある。更に竹内には、モリスには乏しいユーモアの精神がある。

モリスは『裸のサル』の中で、人間の高い知能は狩猟生活に對し必要不可欠なものとして発達してきたという説を出しているが、竹内は『浮気人類進化論』の中で、男と女の言語のレベルで更に解明している。つまり、猿はなぜ人間に進化したのかということについて、言葉による男と女の駆け引き、騙し合い、そして浮気のせいだったという大胆な仮説を提示している。もっとも、実証されているわけではないので、この仮説の信憑性については問題も残る。

人間の体毛が未発達であることについて、モリスが『裸のサル』の中で狩猟生活に適應するためと述べているが、竹内は『ワニはいかにして愛を語り合うか』の中で、若く見せるという競争ゆえに体毛を生やすという遺伝子を発現させない方向に進化したと述べている。

モリスの『舞い上がったサル』(平8)の内容が、竹内の『B C! な話』や『三人目の子にご用心!』の参考になっているだろう。『舞い上がったサル』の第四章「愛の生物学」における「人間はすべての霊長類で最もセクシーな動物である」ということの具体的な考察や「精子戦争」の実態は、竹内の作品にも継承

されている。また、第五章「不滅の遺伝子」の「男の魂は睾丸の中にあり、女の魂は卵巣の中にある」というところは、『三人目の子にご用心!』の副題である「男は睾丸、女は産み分け」のヒントになっているだろう。

次にシュテュンプケの『鼻行類』は、ハイアイアイ群島で独自の進化を遂げた哺乳類についての観察記録の体裁をとっている。研究者名や参考文献も挙げながら、鼻行類についての緻密な観察と分析が綴られている。このシュテュンプケについて、竹内は『もつとウソを!——男と女と科学の悦楽』の中で、「ウソをもつともらしく、ありつただけの知識を動員してある説として構築してしまうあの素晴らしき」と述べている。竹内が学術的な文章の体裁を採りながら、大胆に仮説を展開するところは、シュテュンプケに学んだところもあると言えよう。また、鼻で歩く一群の哺乳類というようなユーモアの精神も竹内に継承されただろう。

次にドーキンスとの関わりについて見ていく。『そんなバカな!——遺伝子と神について』の中では、個体や種といった目に見えるものに着目するのではなく、「共生微生物」という目に見えないものに着目することの重要性が、ドーキンスを援用することによって説かれている。シロアリの「塚はシロアリが作っている」と決めてかからないで、たとえばキノコとシロアリの協調の産物と考えるはどうだろう。打ち明けて言うと、このか

なり穿^{うが}つた考え方（キノコがシロアリを操っている——引用者注）のヒントを私はR・ドーキンスから得ている」として、個体の枠を取り払うドーキンスの視点が参考になったことを述べている。

更に、同書には、「ドーキンス流に言えば、人間は神というミームを初めて乗せた乗り物^{ヴァイクル}なのである。これは逆に、遺伝子は人間においてとうとう神という概念をつくるまでに至ったと言ふことができるかもしれない」とある。ドーキンスの「人間は神というミームを初めて乗せた乗り物^{ヴァイクル}」という人間観のみならず、「遺伝子は、盲目的な自然淘汰の働きによって、あたかも目的をもって行動する存在であるかのように仕立てられている」（『利己的な遺伝子』）という考え方や「ミーム」という考え方も竹内に参考となっているだろう。竹内の場合には、遺伝子を擬人化して表現するということまで行われている。

『利己的な遺伝子』では、カッコウの雛をはじめ生物界の現象を遺伝子レベルで説明し、どのような遺伝子が適応して生き延びたかということにまで言及しているが、このようなところは竹内に継承されている。また、『利己的な遺伝子』では、雄の二つの戦略を「誠実」戦略と「浮気」戦略に大別しているが、このような分類の視点は、竹内の理科系男と文科系男という捉え方のヒントになっているだろう。あるいは『利己的な遺伝子』では、ヒトとウイルスとの相利共生について述べた後、「以上は

将来のための仮説である」とことわっている。このように仮説の部分を経極的に展開するところも竹内に参考となっているだろう。

ドーキンスは科学のことを扱いながらできるだけ専門用語を使わずに分かり易く記しているが、それは竹内にも当てはまる。どちらも生物学の内容を興味津々たる内容にまとめている。それは『利己的な遺伝子』の「まえがき」の「私は生物学はミステリー小説と同じくらい刺激的なものであるべきだと前々から思っている。生物学はまさにミステリー小説なのであるからだ」という言葉に顕著に示されている^等。また『利己的な遺伝子』には、「数式でなくことばをつかって、あたかも個体群が諸々の戦略をめぐる振動を示すかのように描写してきた」とあるが、これも竹内に継承されている。竹内にもできるだけ数式ではなく、言葉によって伝えようとする意図が窺える。

『小さな悪魔の背中の窪み』の中で、「寄生者^{パラサイト}が宿主の外見や行動をいかに操作するかということ」について、ドーキンスの『延長された表現型』が参考になったと記している。ドーキンスのこの説を日本人に適用し、日本人の身長伸びと腸管寄生虫の消滅の関わりとして論じている。確かに『延長された表現型』では、表題の通り、ある延長された表現型が、血縁の遠い個体や、種の異なる個体の遺伝子によって共同的に操作されているということについて詳しく記している。

以上の三人の特質を要約すると、ドーキンスは学者的であり、シュテュンプケは空想的であり、モリスは専門を踏まえて随想的であり、竹内の作風はモリスに最も近い。ドーキンスに比べると、竹内は卑近な例を挙げながら読み物としてユーモラスに記しており、自己の専門分野の先人の業績を多くの読者に知ってもらい、その面白さを分かってもらいたいという意識が強い。そのため、竹内の発想は、文学者の独自の想像力にも近づいており、この辺りはシュテュンプケに近い。ただし、シュテュンプケとは違い、独自の想像力といっても先人の業績を踏まえたものである。このような竹内の随筆は、自然科学と人文科学の接点で創造的なものを生み出していると言えるだろう。更に言えば、竹内が挙げた「好きな作家」が三人共ヨーロッパの男性であるのに対して、日本の女性の視点から斬新な発想で捉えているところに独自性があるだろう。

四

竹内の随筆の特徴は、いずれも動物行動学者から見たユニークな人間論であり、日本人論である。人間をもう一度生物レベルで、あるいは遺伝子レベルで捉え直し、人間の本质について言及している。分子生物学についての新たな知見を踏まえて人間論や文化論や文学作品として展開する識者は少ないだけに、

竹内の主張にはそれだけの意義を認め、評価しなければならぬだろう。遺伝子という言葉が、現代社会の諸相を捉える上でキーワードとなっているので、その視点からヒトのさまざまな営みを説明するおもしろさは極めてユニークであると言える。ただし、地道な努力の積み重ねから成る動物行動学や分子生物学の研究の総体をよく理解し吸収してはいるものの、随筆の素材として安易にそれらに依拠しすぎているという側面も否定はできない。また、人間について遺伝子という観点から論ずることの是非や適用の限界ということについても自らも少し説明すべきであろう。

竹内の随筆の特質を要約すると、次の五つになる。

まず第一に、主張が明快である。文科系男と理科系男、縄文人と渡来人のように大胆な分類によって論点がはっきりしている。主張は明快だが、押しつけがましさが無い。ただし、あまりに割り切りすぎている故の弊害もないとは言えない。二者択一ではなく、両義的な場合などもあるはずである。

遺伝子に焦点を当てているのでやむを得ないのかも知れないが、すべてが遺伝子決定論で明快ではあるが、気にもかかる。「散財して気分がスーッとするのは、そのことがバクチ遺伝子に大いに歓迎されているからだろうし、儉約の結果たまったお金を勘定してウシシとほくそえみたくなるのはケチ遺伝子のゆえなのである」(『そんなバカな!——遺伝子と神について』と

か「鬼の姑遺伝子なるものの頻度が大きく抑え込まれているはずである」(『賭博と国家と男と女』)とか「カモ遺伝子とは、すっかり財産を失くしてしまふほど賭博にのめり込む遺伝的性質」(『同前』)などのように遺伝子を万能なものとして擬人化してしまつて^{註10}いる。分かり易くはあるが、まだこのような遺伝子の存在が証明されているわけではないのであるから、もう少し慎重な配慮があつてもよいだろう。もつとも、竹内の意図は、眞実はどうであろうとも、遺伝子決定論というミームを自己の著作を通して広めることにあるのだろう。

第二に、発想のユニークさが挙げられる。理科系の学問に自由な発想を取り込み、想像を交えて大胆な仮説として提示している。例えば、浮気が人類を進化させたという説にしろ、「人間を立ち上がらせた黒幕は腸管寄生虫や住血吸虫である」(『小さな悪魔の背中の窪み』)という説にしろ、女が男の外見で特に重視しているのが脚の長さであるが、それにはパラサイトが関わつて^{註11}いるという説にしろ、極めてユニークである。そこでは従来の理科系だけの学問には収まりきらない、直観なども含めた〈知〉の新たな可能性を提示している。好奇心が旺盛で、動物行動学を踏まえながら人間への適用を目指している。

竹内の随筆は、引用された他のテクストと交錯し響きあつて、様々な発想を読者の脳裏に浮かび上がらせる。どのような題材を採り上げると、現代人の知的欲求に適合するかということに

ついて勘所を押さえるのが巧みである。そしてそれを表出する際の「仮説のネーミングが絶妙^{註11}」である。

第三に、人間論や日本人論を展開する際に、デズモンド・モリスや日高敏隆と同様に、人間を動物の一種に過ぎないと捉えている。動物行動学や分子生物学の視点から独自の人間観を提示しており、動物の延長にあるホモ・サピエンスの姿が描き出されている。

なお、日高の業績について、秋田国昭は、「人間も動物の一種であり他の動物と変わらない存在であるという立場から人間や社会についての批判を行つて^{註12}いる」と要約している。そして、師の日高の仕事内容は、そのまま竹内にも継承されている。

第四に、採り上げる題材が多岐にわたつて^{註12}いる。進化の歴史を経て来た人間ということと時間的な広がりがあると共に、熱帯の風土など空間的にも広い。動物行動学や分子生物学から捉える人間の生態ということと、目に見える世界だけでなく、肉眼では捉えられないところも視座に入れている。ドーキンスやモリスなどの説も援用しながら、日本人を分析する際に巧みに適用している。

第五に、竹内自身が感動しながらも、対象にのめり込まず距離を置き、ユーモアの精神によつて文章を綴っている。著書の表題を見ても、『そんなバカな!——遺伝子と神について』や『もつとウソを!——男と女と科学の悦楽』のように感嘆符の使用

が目立つが、本文においても感嘆符や疑問符の使用が目立つ。驚くべき真実を感動をもって伝えたいという意気込みが窺える。また、「では何か環境面の問題だろうか。温暖な気候？ 暖流？ 食生活、習慣……？」（『パラサイト日本人論』のように自問自答する過程をそのまま文章に記している。そのことにより、読者に問いかけるような効果をあげている。また、「ひとたび獲物を見つけたなら、そろりそろりと忍び寄り、気づかれそうになるとピタリと静止する」（『浮気人類進化論』）とか「全身の血がスーッと引いていき」（『賭博と国家と男と女』）とか「本を出版し、ガッポ、ガッポと印税を稼ぐことになるのか」（『小さな悪魔の背中の窪み』）のように擬声語や擬態語も臨場感を出すために用いられている。他にも、「かかあ天下」（『賭博と国家と男と女』）とか「イカサマ師」（同）とか「カモにされ」（『パラサイト日本人論』）のような俗っぽい言葉も庶民の実態をリアルに表すために積極的に用いられている。

このように難しい内容を分かり易くユーモアを交えて軽妙な文体で綴っている。科学は決して難しいものではなく、身近なものだと思わせるところに巧みさがある。専門的な知識を必要としないような親しみ易い文章に仕上げているところに特質がある。^{注13}

以上の特質からも明らかかなように、竹内の随筆では、今までの常識や思い込みに囚われずに綴っており、動物行動学や分子

生物学の視点から斬新な人間観や生命観を提示している。抽象概念についても、できるだけ具体的に記しており、奔放かつ緻密な知的エンターテイメントという要素がある。ドーキンスなどの先人の説に依拠しすぎる弱点がないわけではないが、人間社会を従来の人文諸科学とは違った視点から捉えることは有効であるだろう。

ただし、利己的な遺伝子のプログラムの他に、外的な要因がほとんど考慮されない場合がある。外的な要因とは、社会的、経済的、政治的な要因などである。例えば、『そんなバカな！——遺伝子と神について』の第三章には「出生率は低下しない」ということが進化の観点から説明されている。だが、このような問題を論じる際には、複眼的な視点が必要であろう。つまり、親や学校などによるしつけや教育、養育にかかる費用や経済力、政治的な動向や地球環境の変化などである。そのような複合的な視点を取り込まないと、主体的な判断をする各個人を捉え、ひいては複雑に錯綜した現代人の内面を捉えるには十分とは言えない。遺伝子の視点によって人間の盛衰を論じるには人間社会の変化は早すぎると思うので、人間を論の対象とする場合には、人文諸科学をもっと有効に関連させるべきであろう。

ところで、竹内は寺田寅彦の影響も受けている。寺田について、『賭博と国家と男と女』の中で「映画評論に俳句論、はたまた日本人論。話題はありとあらゆる分野に及んでいる。（中略）」

研究テーマにしろ、随筆のネタの選び方にしろ、その抜群のセンスには惚れ惚れとさせられる」と述べており、心酔していることが分かる。その寺田が『科学と文学』の中で、「文学と科学といふ名称の対立の為に、因襲的に二つの世界は截然と切り分けられて来た。文学者は科学の方法も事実も知らなくても少しも差障りはないと考へられ、科学者は文学の世界に片足をも入れるだけの係はりをもたないで済むものと思はれて来たやうである。併し二つの世界はもう少し接近してもよく、寧ろ接近させなければならぬやうに自分には思はれるのである」と述べている。また、「芸術家は、科学者に必要なと同程度、若しくは其れ以上の観察力や分析的の頭脳をもつて居なければなるまいと思ふ」とある。これらの言説は、随筆を執筆する竹内の励みになったであろうと推測される。

『科学と文学』には、「随筆とは筆者の真実、少くも主観的真実を記録したもの」ともあり、しかも、「論理的な論理を要求しない」にも拘らず、「非論理的な論理」を持っており、それは「今の人間の未だ発見し意識し分析し記述し命名しないところの、人間の思惟の方則」を「掘出し認識する」使命にも通ずるものであると結論づけている。竹内の随筆も、この寺田の主張に通ずるようなところに先駆的な面白さがある。竹内の仮説が、日進月歩を遂げる分子生物学によって、いずれ科学的に裏付けられるかも知れない。

遺伝子を巡る分子生物学の新たな〈知〉の領域について、存在論的にそれらはいかなる可能性を持ち存在するのか、あるいは認識論的にいかにそれらを知り語り得るかなどと探究していくことが、竹内の一連の創作活動の目的としてあると言えるのではないだろうか。分子生物学によって生命体の構造が明らかになればなるほど、生命への畏怖はかえってそのために深められるだろう。人間の〈知〉が進むにつれて、文学も進化しなければならぬはずである^{註4}。

ヒトゲノムの研究の進展によってヒトの解明が更に進み、そのことによつて竹内の新たなユニークな人間観が深まりを見せると共に、人間や社会そのものへの洞察が深化することを期待する。科学と人間の関わるところで、真の意味での文明批評家・人性批評家となることによつて、軽妙な文体そのものも変容するかもしれない。そのためには、寺田の『科学と文学』の中の言葉に依れば、「作者自身が被試験物質乃至は動物となつて、試験管なり培養槽なり檻なりの中に飛込んで焼かれいぢめられて其の経験を歌ひ叫び記録することである。つまり、傍観者のな姿勢を否定し、当事者の立場で現実を凝視することであろう。

広い視野で見れば、竹内の随筆のテーマが持つ問題性は、彼女一人のものでなく、同時代のパラダイム全体が持つ問題だとさえ思われる。遺伝子を巡る言説が、単に理科系の分野に留まらず、人文科学を巻き込んで意味付けする必要があるからであ

る。

注1 「朝日新聞」(平8・1・14)

注2 「現代思想」(平4・5)

注3 竹内自身も『浮気人類進化論』(平10、文春文庫)の「文庫版のため少々長いあとがき」の中で、当時の自作への書評について引用しながら触れている。それでも丸谷才一などの文学者からは肯定的な評価であったが、長谷川寿一などの理科系の分野からは否定的な評価であったことが綴られている。

注4 『賭博と国家と男と女』の「あとがき」の中でも、竹内は自己の作品について「人間行動の謎に私なりに迫るといふ仕事」と述べている。

注5 『舞い上がったサル』について、竹内は『もつとウソを！——男と女と科学の悦楽』の中で言及している。

注6 『鼻行類』が事実に基づくものであるかどうかということについては、カール・D・S・ゲータス『シユテンプケ氏の鼻行類』(平1、思索社)に詳しく記されている。

注7 R・ドーキンス『延長された表現型——自然淘汰の単位としての遺伝子』(昭62、紀伊国屋書店)の「まえがき」にも「私はこの本を、できるかぎり楽しんで読めるものにしようと心がけてきた」とある。

注8 『賭博と国家と男と女』(平8、文春文庫)の「解説」で、後藤正治は「彼女の書は、自然科学をベースに、自由でオリジナルな思考を付加させて、人間の行動原理の解明に新たな角度から迫らんとしているもの」と的確に指摘している。

注9 分子生物学と文学の関わりについては、他に拙稿「柳澤桂子論」(『国語国文学研究』37号、平14・2)や「多田富雄論」(『九州産業大学国際文化学部紀要』21号、平14・3)等を参照頂きたい。

注10 「小さな悪魔の背中の窪み」の中で、結核患者の女性が色白なのは結核菌の陰謀ではないかと推測しているが、これも細菌を擬人化した用例と言える。

注11 井上ひさし・秋山巖・井田真木子「鼎談書評——第二十二回 常識をひっくりかえす」(『本の話』平9・4)の中の井田の言葉。

注12 秋田国昭「日高敏隆」(『浅井清他編』新研究資料現代日本文学第三巻 評論・論説・随想I)平12、明治書院)

注13 竹内と日高敏隆との共著「もつとウソを！——男と女と科学の悦楽」の中で、日高は「科学の話にしても、高所から人を見下すような態度やもつたいぶつた文章、必要以上に難解だったり、陳腐であつてはつまらないし誰も読まないでしょう。卓抜なアイデアによる研究とか新しい視点があつて、それを紹介しながら人間や社会についてあれこれ考える。それによつて新しい世界観や批判力が得られれば素晴らしいこと」だと述べている。これは竹内のことを語っていると共に、日高自身のことを語っているとも言える。

注14 因みに、栗木京子は「理科系、文科系って？」(『朝日新聞』平15・7・26)の中で、歌人で細胞生物学者である永田和宏の短歌を挙げ、「闇に光る蛍を幻想的に見つめるのではなく、永田氏は発光のメカニズムについて思いをめぐらせている」ところに理科系の文学者の独自性を指摘している。